

## 主体的に問題解決に取り組む子どもを育てる社会科学習指導 ～資料をもとに自分の考えをつくる活動を通して～

### 要約

現代社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化しており、予測が困難な時代となっている。このような時代を生き抜いていくために、社会の変化に受身に対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人ひとりが自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である。つまり、知識の量やあらかじめ定まった問題を効率的に解くことができる力だけではなく、膨大な情報から何が重要であるか主体的に判断し、自ら問いをもって解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を見出していくことが必要とされている。

本学級の社会科に関するアンケート調査では、社会科が好きと感じる児童が21名、嫌いと感じる児童が13名であった。嫌いと感じる児童の主な理由は、「覚えることが多いから。」「内容が難しくて苦手だから。」「どのようにして調べたらいいのかわからないから。」などであった。本学級の児童は社会科の学習に対して学習意欲はあるものの、学習対象に問題意識をもつことや、資料等から必要な情報を取り出すこと、自分の考えを文章で表現することに課題があった。また、社会科は暗記教科であるという意識もっていた。そこで、社会的事象に対して問いをもち、自ら意欲的に問題解決に取り組む子どもを育てることを目指し、本研究主題を設定した。また、単元を通して学習意欲や問いを連続させるために、資料をもとに自分の考えをつくる活動を重視することにし、本副主題を設定した。

以上のことから、次のような具体方策のもと研究を進めていくことにした。

#### (1) 単元構成の工夫

子どもが資料をもとに問題意識を連続発展させ、主体的に問題解決に取り組めるように、単元の中に学習問題Ⅰと学習問題Ⅱと、2つの学習問題を設定する。

#### (2) 資料活用の支援の工夫

子どもたちが、資料をもとに自分の考えをつくることのできるような支援を工夫する。

#### (3) 交流活動の工夫

子どもたちが、自分の考えを意欲的に伝えることができるように交流活動の在り方を工夫する。

実践の結果、次のような成果(○)と課題(●)を得た。

- 単元の中に学習問題Ⅰと学習問題Ⅱと2つの学習問題を設定したことで、子どもの問題意識を連続発展させることができ、主体的に問題解決に取り組むことができた。
- 自分の考えを意欲的に伝え合うことができるように、交流活動の仕方を工夫したことで、協働的に追究できるようになり、考えを深めることができるようになった。
- 資料活用の支援を工夫したことで、資料をもとに考えをつくったり発表したりできるようになった。そのことで、考えをさらに深めることができるようになった。
- 資料をもとに自分の考えをつくる活動を積み上げ、自分の考えをまとめることへの苦手意識をなくしていくことが必要である。

**キーワード** 主体的に問題解決、予想を立てる、資料をもとに自分の考えをつくる活動

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会的要請・現代教育の動向から

現代社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化しており、予測が困難な時代となっている。このような時代を生き抜いていくために、社会の変化に受身に対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人ひとりが自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である。つまり、知識の量やあらかじめ定まった問題を効率的に解くことができる力だけではなく、膨大な情報から何が重要であるか主体的に判断し、自ら問いをもって解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を見出していくことが必要とされている。

このことから、社会的事象に対して自分の問いをもち、主体的に問題解決に取り組む子どもを育てることに意義があると考え、本主題を設定した。

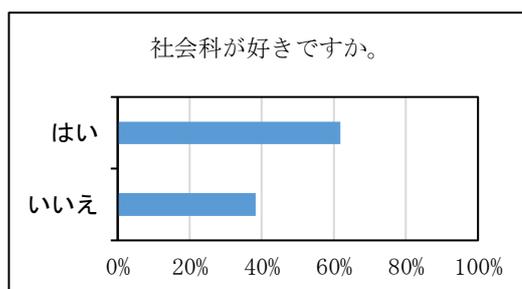
### (2) 社会科の本質から

現行学習指導要領には、「基礎的・基本的な知識・技能を活用し、学習問題を追究・解決することができるようにするために、各学年の段階に応じて、観察、調査したり、地図や地球儀、統計、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用したり、社会的事象の意味や働きなどについて考え、表現したりする力を育てること」が示され、問題解決的学習の充実が図られてきた。

中央教育審議会における次期学習指導要領では、社会科改訂の要点として、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことが挙げられている。このことは、児童が問題を解決する活動の一層の充実が求められていると言える。そこで、資料をもとに自分の考えをつくる活動を通して、主体的に問題解決に取り組む子どもを育てる社会科学習指導を行うことは、大変価値あることだと考える。

### (3) 児童の実態から

本学級の児童34名に対して、5月に行った社会科の学習に関するアンケート調査では、社会科が好きと感じる児童が21名、嫌いと感じる児童が13名であった。【資料1】嫌いと感じる児童の主な理由は、「覚えることが多いから。」「内容が難しくてわからないから。」「どのようにして調べたらいいのかわからないから。」などであった。このことから、本学級の児童は社会科の学習に対して学習意欲はあるものの、学習対象に問題意識をもつことや、資料等から必要な情報を取り出すこと、自分の考えをつくることに課題がある。また、社会科は暗記教科であるという意識をもっている。そこで、社会的事象に対して問いをもち、自ら意欲的に問題解決に取り組む子どもを育てることを目指し、本研究主題を設定した。また、単元を通して学習意欲や問いを連続させるために、資料をもとに自分の考えをつくる活動を重視することにし、本副主題を設定した。



【資料1】5月アンケート結果

## 2 主題の意味

### (1) 主題「主体的に問題解決に取り組む子どもを育てる」について

「問題解決に取り組む」とは、学習問題を設定し、その問題の解決に向けて資料等を用いて調べ、社会的事象の仕組みや働き、意味を考え、社会への関わり方を選択・判断して表現し、社会生活について理解したり、社会への関心を高めたりすることである。

「主体的に問題解決に取り組む子ども」とは、問題に対して自分ならではの予想を立て、他者と協働的に追究して、追究結果をもとに問題に対して自分の考えを深めることができる子どもである。

### (2) 副主題「資料をもとに自分の考えをつくる活動」について

「資料をもとに自分の考えをつくる活動」とは、児童が資料から学習問題を見出し、根拠や理由を明らかにしながら予想を立て、問題解決に向けて資料をもとに、自分の考えをつくる活動である。そして、一人ひとりが見つけた考えを友達と交流することで自分の考えをさらに見直し、社会的事象の仕組みや働き・意味を捉えていく活動である。

### (3) 主題と副主題の関連

子どもたちはこれまで社会科見学など、自分が知りたいことや疑問に思ったことを実際に見て学んだり、そこで働いている人に直接インタビューしたりして意欲的に取り組んできた。第5学年における社会科学習は、地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料から社会的事象をとらえたり、社会的事象の意味について考えたりして表現していく学習である。つまり、資料から問題意識を連続させ、学習問題を追究し社会的事象の意味を捉えていく学習である。そのために、資料をもとに自分の考えをつくる活動を取り入れることによって、主体的に問題解決に取り組むことができると考える。

## 3 研究の目標

第5学年社会科の学習において、資料をもとに自分の考えをつくる活動を行い、主体的に問題解決に取り組む子どもを育てる学習指導の在り方を究明する。

## 4 研究の仮説

第5学年社会科の学習において、社会的事象の仕組みや働きを捉える段階と社会的事象の意味を捉える段階で、資料をもとに自分の考えをつくる活動を行えば、主体的に問題解決に取り組むことができるようになるであろう。

## 5 研究の構想

具体的には、以下の3つの方策で取り組む。

### (1) 単元構成の工夫

子どもが資料をもとに問題意識を連続発展させ、主体的に問題解決に取り組めるように、単元の中に学習問題Ⅰと学習問題Ⅱと、2つの学習問題を設定する。その違いは次のとおりである。

- ・学習問題Ⅰ…社会的な事実を追究する問いである。社会的事象に関係する事実や社会的事象の仕組みを捉えることを目的とし、資料をもとに学習問題を明らかにする。「いつ、どこで、誰が、何を、どのような、どうした」といった事実を明らかにする。
- ・学習問題Ⅱ…社会的事象の意味を追究する問いである。学習問題Ⅰの上に立ち、時代の変化に即した今日的な課題に対して「なぜ(どうして)、～しているのか」「何のために、～しているのか」といった理由や原因を追究し社会的事象の働きを捉える。

さぐる段階とふかめる段階に、資料をもとに自分の考えをつくる活動を位置付ける。

段階	学習活動	ねらい
つかむ	教材と出会い、学習問題Ⅰを設定する。 ・社会的事象(全体像・中心事例)との出会い ・気づいたことや疑問点を交流し、学習問題Ⅰの設定 <b>学習問題Ⅰの設定</b> ⇒予想	○ 教材と出会い、自分なりの問いをもつ。 ○ これまでの学習内容をもとに予想する。
さぐる	学習問題Ⅰを追究し、社会的事象に関係する事実、社会的事象の仕組みを捉え、学習問題Ⅱを設定。 ・学習問題Ⅰの追究、解決 <b>学習問題Ⅱの設定</b> ⇒予想	○ 社会的事実を捉える。 ○ 事実を関係づけて、そこから考えをつくる。 ○ これまでの学習内容をもとに予想する。
ふかめる	学習問題Ⅱを追究し、社会的事象の働き・意味を捉える。 ・学習問題Ⅱの追究、解決	○ 考えを交流する中で、追加・付加・修正し意味や価値を捉える。
かかわる	社会的事象と自分とのかかわりを考える。	○ 社会的事象に対する自分のかかわり方・在り方を判断する。

(2) 資料活用の支援の工夫

子どもたちが、資料をもとに自分の考えをつくったり、発表したりできるような支援を工夫する。

- ①予想を立て資料をもとに調べ活動を行う。
- ②資料の読み取り方や資料を活用した発表の仕方を提示する。
- ③資料を使った思考を促す板書を工夫する。④教師自作の資料を準備する。等

(3) 交流活動の工夫

子どもたちが、自分の考えを意欲的に伝えることができるように交流活動の在り方を工夫する。

- ①KJ法を使って予想の交流を行う。
- ②自分の考えをノートに書かせてから、グループ交流活動を仕組む。
- ③ペア交流、グループ交流、全体交流を行う。等

6 研究計画の概要

(1) 研究計画

月	研究計画	月	研究計画
5月	研究主題の設定・子どもの実態調査	10月	実証及びデータ収集・データ分析
6月	実態調査の結果分析	11月	教材研究
7月	研究構想・検証授業	12月	検証授業・実証及びデータ収集 データ分析とまとめ
8月	研究構想・教材研究	1月	研究のまとめ・報告書作成
9月	教材研究・検証授業	2月	研究報告

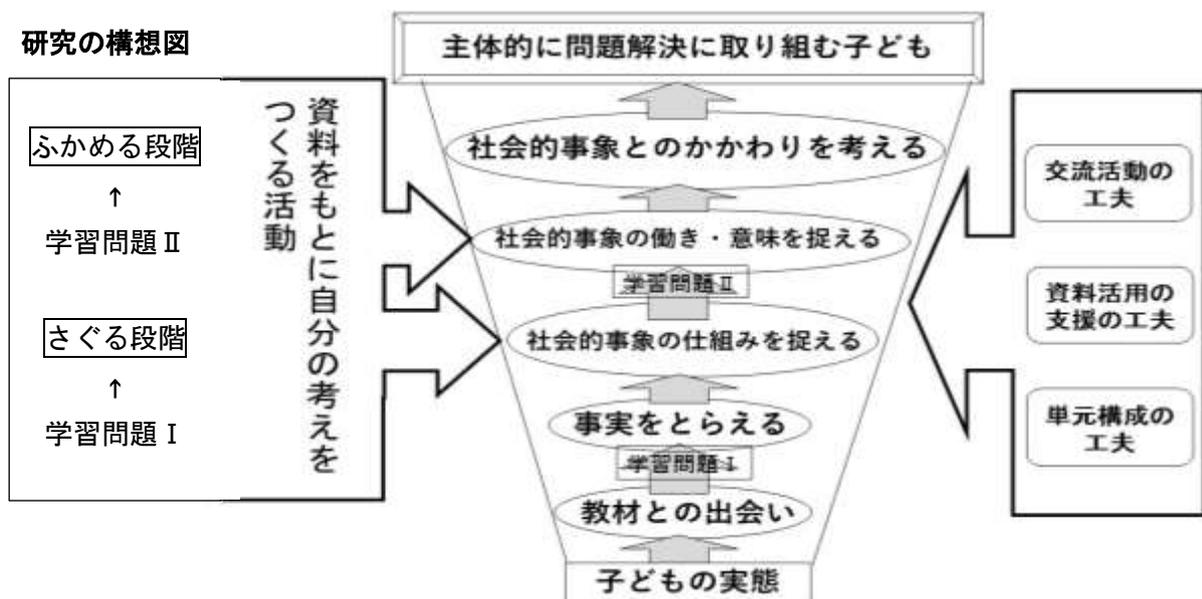
(2) 仮説検証の内容と方法

検証内容	検証方法	評価	評価の観点
予想ができていますか	学習ノート	A	既習経験から根拠、理由を明らかにして予想を立てることができる。
		B	既習経験から予想を立てることができる。
		C	A、B以外
協働的に追究しているか	学習ノート 発言	A	資料を活用し互いの考えを交流しながら問題を追究することができる。
		B	資料を活用し自分の考えを伝えることができる。
		C	A、B以外
自分の考えを深めているか	学習ノート 発言	A	自分の考えを付加・修正し、新たな問いを見出すことができる。
		B	自分の考えを付加・修正しまとめることができる。
		C	A、B以外

(3) 抽出児童

児童A（上位層）、児童B（中位層）、児童C（低位層）を抽出し、各検証内容を評価する。

7 研究の構想図



## 8 研究の実際

(1) 検証授業① 第5学年 食料生産を支える人々 「水産業のさかんな地域」

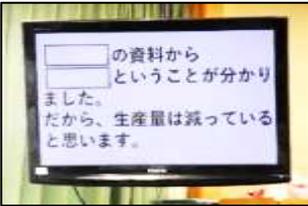
### ① 単元構成

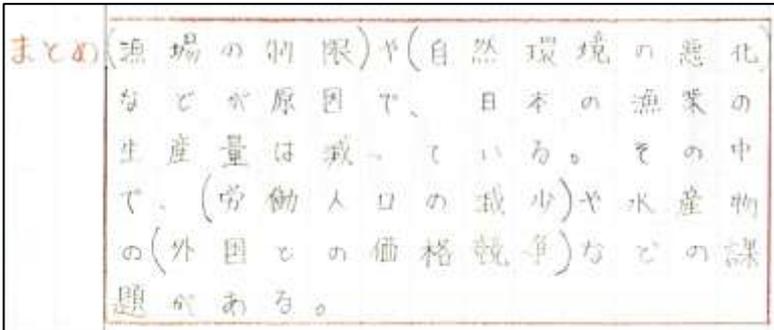
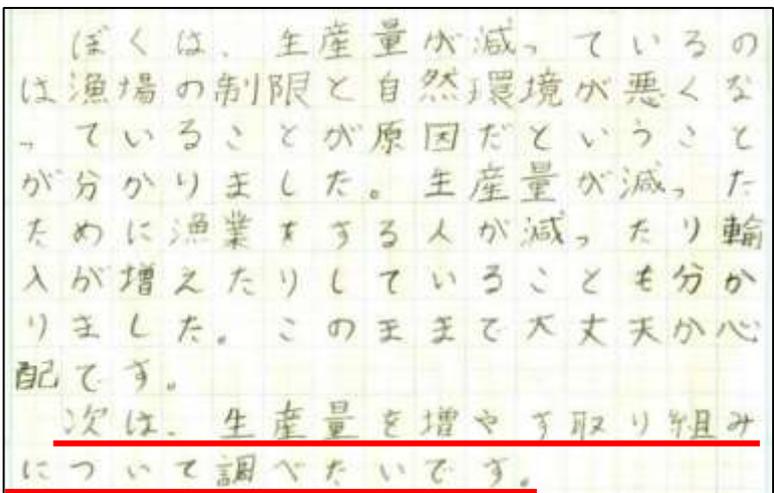
段階	学習活動	ねらい
つかむ ①	水産物の産地や水揚げ量、漁港を調べ、学習問題Ⅰを設定する。 ・お寿司屋のメニューを用いて産地を調べる。 ・資料を用いて日本の漁港と水産物の量を調べる。 ・気づいたことや疑問点を交流し、学習問題Ⅰを設定する。 <b>学習問題Ⅰ 水産業はどのような工夫や努力をして水産物を消費者にとどけているのだろう。⇒予想</b>	○ 身近な水産業との出会いや資料を使って自分なりの問いをもつ。 ○ これまでの学習内容をもとに予想する。
さぐる ④	学習問題Ⅰを追究し、水産業に関する事実や仕組みを捉え、学習問題Ⅱを設定。 ・学習問題Ⅰの追究、解決 ・資料をもとに、さんま漁を知り消費者に届くまでの流れを捉える。 <b>学習問題Ⅱ なぜ、生産量が減り続けているのだろう。⇒予想</b>	○ 社会的事実や仕組みを捉える。 ○ 事実を関係づけて、そこから考えをつくる。 ○ これまでの学習内容をもとに予想する。
ふかめる ②	学習問題Ⅱを追究し、日本の水産業の働きを捉える。 ・学習問題Ⅱを追究し、解決する。(本時) ・養殖業、栽培漁業の取り組みを知る。	○ 考えを交流する中で、付加・修正し意味や価値を捉える。
かかわる ①	日本の水産業の未来を考える。	○ これからの日本の水産業の在り方について自分の考えをまとめる。

### ② 本時の主眼

- 生産量の減少の理由を写真やグラフなどの資料から自分の考えをまとめ、我が国の漁業の課題について考えることができるようにする。

### ③ 展開 本時 平成29年9月21日(木曜日) 第3校時 5年4組教室

段階	学習活動	支援の考察(成果○ 課題●)
つかむ	1 前時学習の予想を確認し、本時学習のめあてをつかむ。 ○ 前時学習の予想を焦点化したキーワード(自然環境、量の制限、輸入、労働人口)をもとに、生産量の減少の理由を明らかにするため、めあてをつかむ。  <b>【写真1】 焦点化したキーワード</b> <b>なぜ生産量は減り続けているのだろう。</b>	○ 前時学習の予想を焦点化したキーワードを提示したことは追究の意欲をもたせる上で有効だった。 <b>【写真1】</b>
さぐる	2 教科書や資料集、本の資料をもとに、生産量の減少の理由について調べて自分の考えをまとめ、グループで交流する。 ○ 遠洋漁業で1970年頃から減った理由を調べる。 ○ 沖合漁業で1980年後半から減った理由を調べる。  <b>【写真2】 資料の活用</b>  <b>【写真3】 発表の仕方の提示</b>	● たくさんの資料を用いて調べ学習をさせたため、時間内に終わる子どもが少なかった。 ● 資料のグラフをそのまま写す子どもがいたので、理由を言葉で書かせる指導が必要であった。

<p>ふかめる</p>	<p>3 生産量の減少の理由から水産業の課題について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 漁業で働く人の数の変化をグラフから読み取る。</li> </ul>  <p>○ 漁師の中陳さんの話から課題を明らかにする。</p> <p style="text-align: center;">【写真4】自分の考えの交流</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 資料を活用した発表の仕方を提示したことで、資料をもとにして自分の考えを伝えることができた。</li> <li>○ 「減少したことで何か困ることはないかな」と発問したことで、我が国の漁業の課題について、教科書の資料をもとに考えることができた。</li> <li>○ 資料の漁師の話を読んだことで、輸入された安い水産物が増え、外国との値段競争が起きることを考えることができた。</li> </ul>
<p>かかわる</p>	<p>4 本時の学習を振り返り、感想を交流する。</p>  <p style="text-align: center;">【資料2】児童のノート</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前時に提示した生産量の変化のグラフを提示し、「このままだと私たちの生活はどうなりますか。」と問うたことで、次時学習へつながる新たな問いをもつことができた。</li> </ul>

④ 検証授業①の考察（成果○ 課題●）

- 予想を立てさせ、調べ活動させたことで子どもは学習意欲を高め、主体的に調べ活動を行わせることができた。
- 予想を立てた時より、さらに詳しい生産量の変化のグラフを提示し細かく読み取ったことで、子どもの課題意識をさらに高めることができた。
- 資料を活用した発表の仕方を提示したことは、自分の考えを整理して発表することに有効であった。交流活動も活発にできた。
- グループ交流で予想を立てたが、自分が考えた予想と本時学習とのつながりが不十分だった。だから、自分の考えを深めていくために予想をノートに書かせる必要があった。
- たくさんの資料を用いての調べ学習だったため、時間内に調べ終わる子どもが少なかった。事前に予想とつながる資料を精選して準備する必要があった。
- 1時間の中の活動が多かったので、調べ学習や交流時間を十分に確保できなかった。

① 単元構成

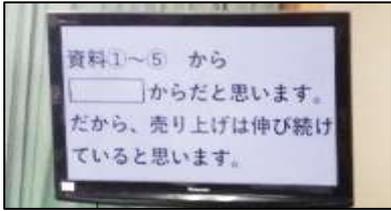
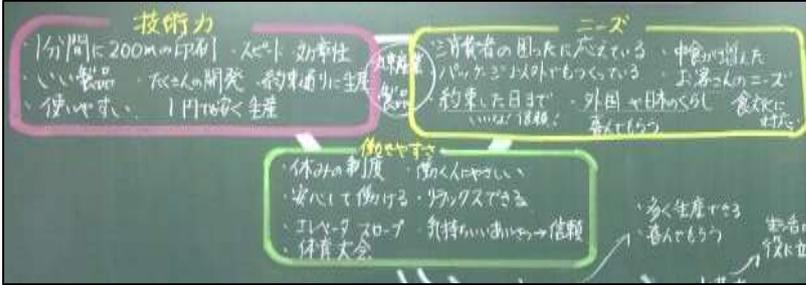
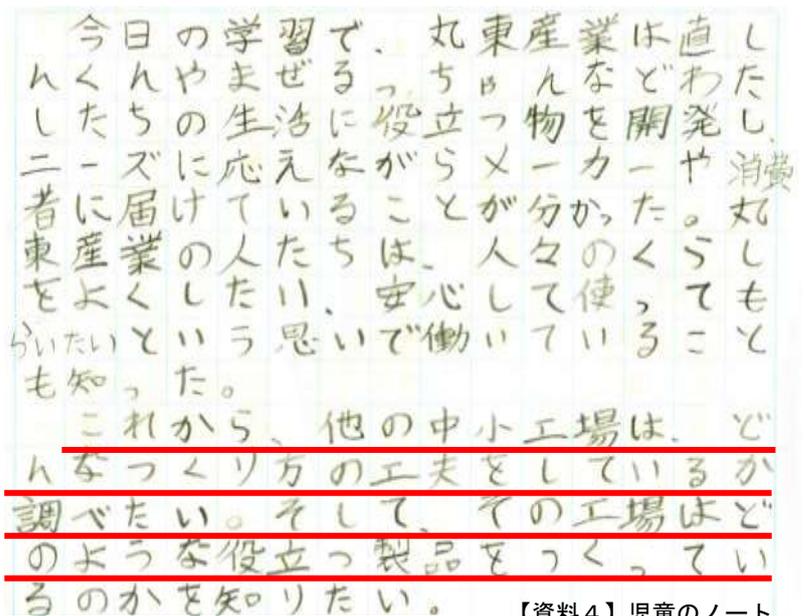
段階	学習活動	ねらい
つかむ ①	工業製品の仲間分けをしたり、工業製品の変化を読み取ったりして学習問題Ⅰを設定する。 ・機械、化学、金属、食料品、せんい、その他 ・軽工業から重化学工業へ ・気づいたことや疑問点を交流し、学習問題Ⅰの設定 <b>学習問題Ⅰ 日本の工業には、どのような特色があるのだろうか。→予想</b>	○ 身近な工業製品との出会いや資料で自分なりの問いをもつ。 ○ これまでの学習内容をもとに予想する。
さぐる ③	学習問題Ⅰを追究し、工業に関係する事実や仕組みを捉え、学習問題Ⅱを設定する。 ・学習問題Ⅰの追究、解決 ・日本の大工場と中小工場の特色を理解する。 ・地元小郡市の丸東産業（パッケージづくり工場）との出会い <b>学習問題Ⅱ 丸東産業はなぜ、売上げを伸ばし続けているのだろうか。→予想</b>	○ 社会的事実や仕組みを捉える。 ○ 事実を関係づけて、そこから考えをつくる。 ○ これまでの学習内容をもとに予想する。
ふかめる ③	学習問題Ⅱを追究し、日本の中小工場の働きを捉える。 ・資料をもとに学習問題Ⅱの追究し解決する。(本時) ・他の中小工場の工夫や努力を知る。	○ 考えを交流する中で、付加・修正し意味や価値を捉える。
かかわる ①	日本の工業生産の未来を考える。	○ これからの日本の工業生産の在り方について自分の考えをまとめる。

② 本時の主眼

- 丸東産業が売上げを伸ばしている理由を、製品や資料から自分の考えでまとめることができるようにする。
- 丸東産業の工業製品は消費者の生活向上に重要な役割があることを理解することができる。

③ 展開 本時 平成29年12月1日(金曜日) 第3校時 5年4組教室

段階	学習活動	支援の考察(成果○ 課題●)
前時	丸東産業は、なぜ売上げを伸ばし続けているのだろうか。 1 製品や資料をもとに理由を調べ、ワークシートに書く。	○ 精選した資料を用いたことで、売上増の理由をワークシートに自分の考えで書くことができた。
本時 つかむ	<div data-bbox="159 1209 662 1848" data-label="Image"> <p>【写真5】精選した資料と製品サンプル</p> </div> <div data-bbox="670 1209 1436 1848" data-label="Image"> <p>【資料3】児童のワークシート</p> </div>	
	2 前時学習から本時学習のめあてをつかむ。 ○ 前時学習から売上が伸び続けている理由を明らかにする。	

<p>さぐめる</p>	<p>3 前時学習で、製品や資料をもとに調べた売上高増加の理由を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ どの製品や資料から考えたのか根拠をはっきりさせ、発表する。</li> </ul>  <p>【写真6】発表の仕方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発表した内容から、売上増の理由が「技術力」「ニーズ」「働きやすさ」であることを捉える。</li> </ul>  <p>【写真7】板書の工夫</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 資料を活用した発表の仕方を提示したことで、自分の考えを意欲的に伝えることができた。</li> </ul> <p>【写真6】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 思考を促すように板書を工夫したことで、売上増の理由を焦点化することができた。【写真7】</li> <li>○ 資料を活用し互いの考えを交流したことで、売上増の理由をさらに追究することができた。</li> </ul>
<p>ふかめる</p>	<p>4 丸東産業で働く人の思いや願いを知り、わたしたちの生活とのつながりを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 丸東産業の思いや願いを考えることで、メーカーの販売力の向上や消費者の生活の向上を捉える。</li> <li>○ 「技術力」「ニーズ」「働きやすさ」のキーワードを使って自分でまとめを書く。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>丸東産業は、「人々の生活をよくしたい」という思いのもと、高い技術力とニーズに応え、働きやすさをよくして製品をつくっている。だから、売り上げを伸ばし続けている。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 丸東産業の社員の声（手紙）を聞くことで、丸東産業の工夫や努力を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ グループ交流をしたことで、自分の考えを付加・修正することができた。</li> <li>○ 丸東産業の社員の声（手紙）を読むことで、働く人の努力や工夫に目を向けることができた。</li> </ul>
<p>かかわる</p>	<p>5 本時の学習を振り返り、丸東産業の工業生産のすばらしさについて思ったことをノートに書き、交流する。</p>  <p>【資料4】児童のノート</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 他の中小工場の写真を提示したことで、新たな問いをもつことができた。</li> </ul>

④ 検証授業②の考察（成果○ 課題●）

	予 想	協 働	考えを深める
--	-----	-----	--------

- 予想もワークシートに書かせたことで、予想と調べ活動がつながり、意欲的な調べ活動をすることができた。
- 資料を精選したことで、すべての児童が資料を活用し自分の考えをまとめ、伝え合うことができ、考えを深めることができた。
- 丸東産業という地域素材を教材化したことで、子ども達は学習意欲を高め、とても主体的に学習に取り組むことができた。
- キーワードを使って、自分の考えをまとめることができなかつた子がいた。さらに、個に応じた支援を考えていきたい。

9 研究のまとめと今後の課題

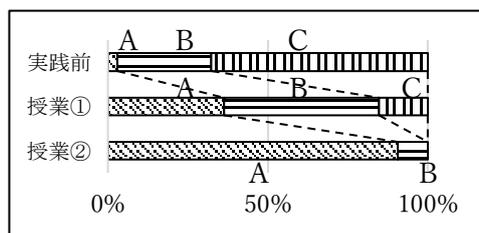
(1) 研究のまとめ

検証1 予想ができていますか

- ・各授業において「予想はできているか」を学習ノートから検証した。

A	既習経験から根拠、理由を明らかにして予想を立てることができる。
B	既習経験から予想を立てることができる。
C	A、B以外

検証授業①では、評価がAの子どもが36%、Bの子どもが48%、Cの子どもが16%であった。検証授業②では、評価がAの子どもが90%、Bの子どもが10%、Cの子どもが0%だった。【資料5】これは、既習とのずれを生じさせる資料を提示したこと、導入時で既習学習の振り返りをしたこと、丸東産業の製品を見せたり触らせたりしたことが有効だったと考える。



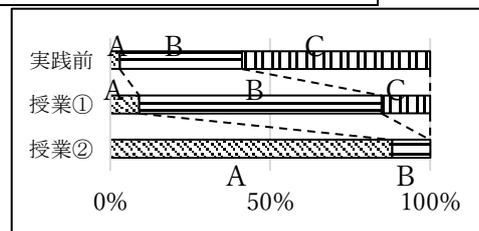
【資料5】検証授業①と②の比較

検証2 協働的に追究しているか

- ・各授業において「協働的に追究しているか」を学習ノートと発言から検証した。

A	資料を活用し互いの考えを交流しながら問題を追究することができる。
B	資料を活用し自分の考えを伝えることができる。
C	A、B以外

検証授業①では、評価がAの子どもが9%、Bの子どもが76%、Cの子どもが15%であった。検証授業②では、評価がAの子どもが88%、Bの子どもが12%、Cが0%だった。【資料6】これは、予想してから調べ活動の時間を十分に確保したこと、資料を活用した発表の仕方を提示したことが有効だったと考える。



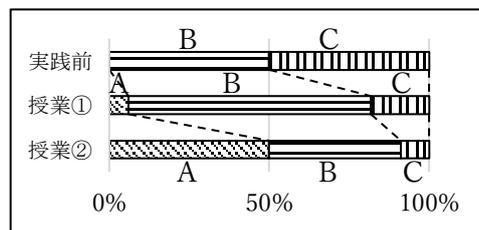
【資料6】検証授業①と②の比較

検証3 自分の考えを深めているか

- ・各授業において「自分の考えを深めているか」を学習ノートと発言から検証した。

A	自分の考えを付加・修正し、新たな問いを見出すことができる。
B	自分の考えを付加・修正しまとめることができる。
C	A、B以外

検証授業①では、評価がAの子どもが6%、Bの子どもが76%、Cの子どもが18%であった。検証授業②では、評価がAの子どもが50%、Bの子どもが41%、Cの子どもが9%であった。【資料7】これは、互いの考えを交流したこと、教師の発問や支援によって自分の考えが深まり新たな問いを見出すことができたことが有効だったと考える。C評価には、さらに個に応じた支援をしていきたい。



【資料7】検証授業①と②の比較

#### 検証4 抽出児童の変容

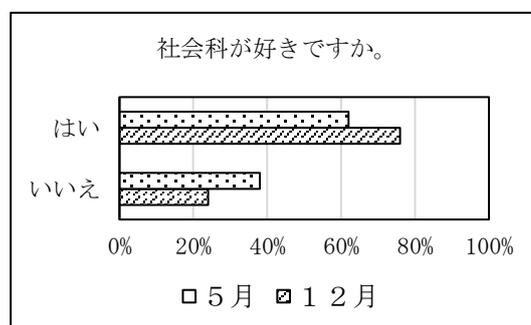
児童A、児童B、児童Cの3人が検証授業②において、B以上の評価であった。これは、単元構成の工夫、交流活動の工夫、資料活用の支援の工夫に取り組んできたからだと言える。

検証授業	実践前	①	②	実践前	①	②	実践前	①	②
児童A	B	A	A	B	A	A	B	B	A
児童B	B	B	A	B	B	A	B	B	A
児童C	C	B	A	C	C	A	C	C	B

【資料8】検証授業①と②の抽出児童の評価

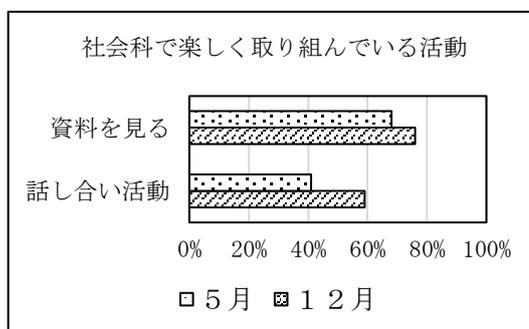
#### (2) アンケートの結果より

実践を終えて、アンケートを実施したところ、5月のアンケートと比べて【資料9】のような変化が見られた。社会科が好きと感じる児童が5名増えて26名、嫌いと感じる児童が5名減って8名であった。前回になかった好きと感じる理由として「予想することが楽しいから。」「授業が楽しいしもっと詳しく調べたいから。」「資料を見比べたり読み取ったりすることが楽しいし面白いから。」「興味をもつことが多いから。」「話し合い活動で意見を出し合うと分かるから。」であった。嫌いと感じる理由として、「覚えることが多いから。(4人)」「自分の考えをまとめることが苦手だから。(2人)」などであった。



【資料9】アンケート結果

社会科で楽しく取り組んでいる活動では、【資料10】のように、資料を見る活動、話し合い活動が増えた。これは、資料をもとに自分の考えをつくる活動に取り組んだからだと考え。しかし、まだ社会科は覚えることが多い教科である意識や自分の考えをまとめることに苦手意識をもっている子がいる。これらの子どもへの支援が今後、さらに必要である。



【資料10】アンケート結果

#### (3) 成果と課題

- 単元の中に学習問題Ⅰと学習問題Ⅱと2つの学習問題を設定したことで、子どもの問題意識を連続発展させることができ、主体的に問題解決に取り組むことができた。
- 自分の考えを意欲的に伝え合うことができるように、交流活動の仕方を工夫したことで、協働的に追究できるようになり、考えを深めることができるようになった。
- 資料活用の支援を工夫したことで、精選した資料をもとに考えをつくらたり発表したりできるようになった。そのことで、考えをさらに深めることができるようになった。
- 資料をもとに自分の考えをつくる活動を積み上げ、自分の考えをまとめることへの苦手意識をなくしていくことが必要である。

#### 《参考文献》

- ・文部科学省 平成20年8月 『小学校学習指導要領解説社会編』 東洋館出版社
- ・文部科学省 平成29年9月 『小学校学習指導要領解説社会編』 ホームページ

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/04/1387017\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/12/04/1387017_3.pdf)